朝鮮戦争国際女性調査団のフランス人団員[1]

松田祐子

はじめに

朝鮮戦争最中の 1951 年 5 月、国際民主女性連盟[2]から派遣された 17 カ国 20 人からなる調査団が北朝鮮を訪れ、戦闘の状況を実際に見、現地の人々に話しを聞いた。その報告書は『私たちは弾劾する：国際民主女性連盟委員会報告　1951 年 5 月 16 日から 27 日の朝鮮』というタイトルで、5 カ国語（英・仏・露・中・韓）で作成され、国連をはじめとする世界中の女性機関・人権機関に送られた。日本でも『血の叫び』として翻訳されたが、ただちに発禁処分となり、訳者は逮捕されている。内容は、アメリカ軍と李承晩軍がいかに非道で残虐な行為を行っているかを示し、告発するものである。アメリカ軍による爆撃、大量虐殺の様子、死亡者、破壊された家屋などの細かな数字のデータ、人々の訴えが書かれ、多くの写真が掲載されており、読む人の感情に強く訴えるものとなっている[3]。

調査団を派遣したのは、国際民主女性連盟という国際的な組織であり、団員の国籍は 17 カ国に及ぶ。しかしながら、この研究にとって、フランス社会とフランス人団員の意識、国際民主女性連盟とフランスの女

---

[1] 本稿は、藤目ゆき氏の研究「国際調査団が見た朝鮮戦争」の一環である。したがって、その目的と内容は、その研究課題「国際調査団に参加した西欧の女性たちがどのような人たちで、どのようにして調査団に参加し、どのように感じ、考えたのか。また自分たちが見たものを自国でどのように伝え、どのような社会的反響を受けたのか」に沿っている。

[2] 現存する国際組織である。

仏語表記：Fédération démocratique internationale des Femmes(FDIF),

英語表記：Women's International Democratic Federation(WIDF).

[3] *Corée, Nous accusons : Rapport de la Commission de la Fédération Démocratique Internationale des Femmes en Corée du 16 au 27 mai 1951,* Imprimerie specile de l' Union des Femmes Françaises.

この報告書の復刻と内容の解説は、藤目ゆき氏によって発表されている。

藤目ゆき「国際調査団のみた朝鮮戦争」『女性・戦争・人権』第 3 号、2000 年。

――（編集・復刻・解説）『国連軍の犯罪―民衆・女性からみた朝鮮戦争』不二出版、2000 年。

性組織とのつながりはとりわけ重要な検証点である。というのは、連盟の会長がユジェニー・コトンという名のフランス人女性であり、さらに幹部にフランス人が多かったこと、また、当初、国際民主女性連盟の本部はパリにあったからである。報告書のタイトル『私たちは弾劾する（Nous accusons.）』は、ドレフュス事件の際のエミーユ・ゾラの告発文『私は弾劾する（J'accuse.）』と、第二次大戦中にフランスの対独協力を告発したアンドレ・シモーヌの同タイトルの本[4]を彷彿させる。

本稿では、国際民主女性連盟という組織の成立した背景と朝鮮戦争調査団に加わったフランス人団員ジレット・ジーグレーがいかなる人物だったのか、また彼女が何をどう感じたのかを、彼女の書いた小説をもとに、当時のフランス社会の状況と重ねてあわせて検証していきたい。

1．国際民主女性連盟とフランスの女性組織

国際民主女性連盟は、1945年11月26日から12月1日にかけてパリで開催された国際女性会議において創設された。初代会長はフランス人ユジェニー・コトン、書記長もフランス人のマリー＝クレール・ヴァイアン＝クチュリエである。採択された連盟規約には、「反ファシズム、民主主義の確立、国際平和、子供の幸福、女性の地位向上」がかかげられ「人種、国籍、宗教、政治思想に関係なく、女性たちが団結する。それによって、市民として、母親として、労働者としての女性の権利を勝ち取り守るために、また子どもを保護し、平和と民主主義と国民の独立を確立するために、ともに働く組織である」と書かれている[5]。

国際民主女性連盟は、1946年1月から国際連合に対して、代表が総会に参加する資格を繰り返し要求し[6]、1948年、国際女性委員会[7]、国際女性連合[8]に続く三番目の女性の組織として、経済社会理事会における「カテゴリーB」の地位を得た。それによって、女性の条件委員会にオブザーヴァーとして参加し、資料や報告を得ることができるようになった。また、女性の条件委員会の同意を得て、会期中に発言が許されることになった[9]。

1958年4月、ユジェニー・コトンはインタビューに答えて、「1939-1945年の戦争を引き起こしたのは、ファシズムでした。このため、国際民主女性連盟の創設者たちは、世界の民主主義を強固にするために働く決意を表明しました。・・・平和を求める時、女性たちは、第一に子どもたちの生活を安全にすることを考えました」と話している[10]。

---

4 アンドレ・シモーヌ（羽田三吉／島谷逸夫訳）『私は弾劾する』東邦出版、1971年。

5 Fédération Démocratique International des Femmes (edité par), *Eugénie Cotton* , 1967, pp.97-98 .

6 ROUSSEAU, Renée, *Les femmes rouges: Chronique des années Vermeersch,* Alvin Michel, 1983, p.83.

7 Conseil international des femmes (CIF)：1888年創設。

8 Alliance international des femmes (AIF)：1902年創設。

9 Chronique ONU-Un bref aperçu des droits des femmes de 1945 à 2009：
http://www.un.org/wcm/content/site/chronicle/cache/bypass/lang/fr/home/archive/issues2010/empoweringwomen/briefsurveywomensrights?ctnscroll_articleContainerList=1_0&ctnlistpagination_articleContainerList=true

10 Women's International Democratic Federation Records, 1945-1975：

このような規約や談話からは、この団体は平和のための、とりわけ女性と子供を守るための組織であり、なんらかのイデオロギーと関係しているようにはみえない。ところが当時、西側からは共産党の団体であるとして否定されていた。また事典には、あえて「なんらマルクスレーニン主義的色彩のあるものではない」と断り書きがつけられている。当初パリにあった本部は、1951年にフランス政府によって追い出され、ベルリンに引っ越しを余儀なくされている。このような見解に対して、ユジェニー・コトンは、「共産党の活動家がいたので、アメリカの新聞は共産党に支配されているとしたのだ」と話している[11]。しかしそれだけなのだろうか。国際民主女性連盟はどのような経緯で生まれ、またどのような活動をしていたのか。

1945年2月、ヤルタ会談が開かれ、連合国とソ連が合流して、戦後の国際秩序が話し合われた。その翌月の国際女性デー（3月8日）に、ロンドンで国際的な女性の会合が開かれた。この時、国際的な女性の連帯組織を作ろうと考えたのが、国際民主女性連盟誕生のきっかけであると言われている。フランス共産党書記長の妻であり、この女性連盟の活動を実質的に動かしていたジャネット・ヴェルメールシは「イギリスの共産党の書記が私たちに国際的なレベルで女性たちのために何か作ることを提案した。私はこの考えをうけ、党にソ連の女性たちがこのような計画を始める気があるかどうか尋ねるように求めた」と話している[12]。この会合に出席していたフランス代表のなかに、国際民主女性連盟の初代会長となるユジェニー・コトンがいた。

当時コトン夫人は、すでに公平無私な優れた女性としてよく知られていた。セーヴル女子高等師範学校を出た物理学者であり、キュリー夫妻やピエール・ランジュヴァンとも親交があった。第二次世界大戦以前に、母校であるセーヴル女子高等師範学校の校長になっており、開かれた考えを持ち、女子教育を推し進めていた。戦争中は、ヴィシー政府[13]によって職を追われ、レジスタンス活動を支援した。彼女の息子は共産党員であり、彼女自身も共産党の支援者であったが、党員証は持っていなかった。彼女が会長に選ばれたのは、最上のブランドイメージを持っているからであった。そのイメージは、共産党員でないことによってさらに補強された。しかし会長は肩書だけでしかなく、実質的な決定をくだしていたのは、事務局のジャネット・ヴェルメールシとそれを補佐するクロディーヌ・ショマであった。ジャネット・ヴェルメールシは「私は党の中で女性を担当しながら、国際民主女性連盟の執行委員会にいた。前面に出ていたのは、コトン夫人、フランソワーズ・ルクレルク、マリー＝クロード・ヴァイアン＝クチュリエである。私たちは、もっと内側の役割を果たしていた」と述べている[14]。

このように、国際民主女性連盟の創設には、複数のフランス人女性が重要な役割を果た

---

http://asteria.fivecolleges.edu/findaids/sophiasmith/mnsss294_main.html

[11] ibid.

[12] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, pp.46-47.

[13] 1940年6月の休戦協定よって、フランスの北半分はドイツ占領下におかれ、フランス政府機関は南部のヴィシーに移転。1944年8月の解放まで、ペタンが率いた対独協力政権がヴィシー政府。

[14] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*,p.63.

している。彼女たちはフランスの共産党系女性団体、フランス女性同盟[15]のメンバーでもあった。フランス女性同盟は、レジスタンスの女性委員会を起源として1944年11月に創設された。コトン夫人は、この組織の創設者の一人であり、会長でもあった。フランス女性同盟のめざしていたのは、「平和、生活状況の改善、女性の政治参加を促す」である[16]。機関誌『フランス女性』には、1945年4月14日と15日に行われたフランス女性同盟の会議に集まった女性たちが、国際的に連携する大きな連盟をつくる準備をしていたことが書かれている。したがって、1945年の年末に世界大会を開催することが、党によってあらかじめ決められていたようである。世界大会のための準備委員会の責任者が、コトン夫人によってフランス女性同盟から選ばれた。参加を呼び掛ける冊子が世界中に発送され、1945年11月26日に40カ国、850人の女性が参加した国際女性会議が開催された[17]。国際民主女性連盟の会長と書記長が選ばれ、この二人の他にも、執行委員に4名のフランス人が選ばれた。この数はソ連と同数であった。代表団は熱狂のなかで規約を採択し、ジャネット・ヴェルメールシは、この出来事を素晴らしい思い出として語っている[18]。

2．冷戦期の国際民主女性連盟

1947年3月12日、トルーマン・ドクトリンによって冷戦の開始が告げられた。同年6月5日マーシャルプランが発表される。これはアメリカの援助によるヨーロッパの経済復興計画であり、それによって共産主義を封じ込めようというものだった。それに先立つ5月、フランスでは共産党閣僚更迭が行われていた。7月、ソ連圏に属さないヨーロッパ16カ国がパリに集まり、マーシャルプランの受け皿として、ヨーロッパ経済協力機構（OEEC）が発足した[19]。ソ連側は、東ヨーロッパがアメリカの勢力圏になることを怖れて、マーシャルプランへの参加を拒否。1947年9月、ポーランドでソ連・東欧・仏伊の9カ国の共産党代表による秘密会合が開かれ、ソ連は社会主義陣営の団結を力説した。10月5日、アメリカの積極的なヨーロッパ支援策に対抗してコミンフォルムが設立され、東欧と仏伊共産党に対するソ連の支配が強化された。仏伊の共産党には、アメリカの援助による経済再建を妨害し、西側の関心を東欧に向けさせないことによって、東欧におけるソ連の勢力圏固めを支援することが求められたのだ。フランス共産党は、レジスタンス以来、政権内にいて非共産党勢力との協調路線をとってきたのだが、それは階級闘争の放棄であると批判され、方針転換を余儀なくされる。フランス共産党のトレーズ書記長は「自己批判」を行い、政権の一員としての役割を捨て、労働者を基盤とする「社会の弱者」を保護し、その利益を代弁するという役割を優先させる。11月と12月には、共産党に支配された労働総同盟（CGT）がフランス各地で大規模なストライキを展開し、暴動や騒優がおこった。しかし非共産系の組合がストライキを拒絶しはじめ、秩序が戻ると、フランスの政

---

15 Union des femmes françaises(UFF). 1998年にFemmes solidaires（女性の連帯）に名称変更し、現在はフェミニストの団体として活動している。

16 Condition féminine en France depuis 1900 à nos jours: http://aventure-des-femmes.rmc.fr/

17 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, pp. 47,57 ; Femmes solidaires(edité par.), *Résisiter c'est créer 60 ans de femmes solidaires :Clara Magazine*, 2005, p.5.

18 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.63.

19 渡辺和行・南充彦・森本哲郎『現代フランス政治史』ナカニシヤ出版、1997年、p.160.

権は右傾化していった。共産党は「外国（ソ連）の政党」として、孤立化していくことになった[20]。とはいえ、共産党がレジスタンスの中で獲得した「祖国を救った英雄」という栄光の遺産を捨てることはなかった。

一連の冷戦の始まる文脈において、国際的な平和運動が次々と生まれた。フランス女性同盟も、危機への解決策として平和主義を前面に出していく。間違っているのはすべて扇動者である敵のほうであるとし、同時に、自らはアメリカ帝国主義という新しいファシストに対してレジスタンスを続ける犠牲者として、姿を現した。自分たちこそが、真のフランス人、愛国者、民主主義者、共和主義者であり、アメリカによる植民地化と闘わなければならないとしたのである。

すでに述べたように、国際民主女性連盟のめざしたものは、ファシズムの撲滅、民主主義と平和の確立、女性の状況の改善、未来の子供たちの幸せである。国際的な協調に興奮し、友好的な雰囲気に心を動かされた多くの女性たちが、連盟の活動に賛同した。しかし国際民主女性連盟のソ連代表ニナ・パポヴァの報告では、「民主主義」という言葉は「ソ連のもの」という意味であった。彼女は、ソヴィエト連邦があらゆる領域で男女の平等を実現したと説明し、ソ連市民の英雄的行為の正当性を確認し「ソ連の女性たちは体制の民主的な精神の中で自分たちの力を積み上げている」と述べる[21]。国際民主女性連盟は、1948年の国際女性デーに、次のように呼び掛ける。「ソヴィエト連邦の女性たち、あなた方の祖国の力と威光がさらに大きくなるように。なぜなら、あなた方は平和と民主主義、自由と民族独立の最も強固な城壁なのだから[22]。」

冷戦の開始にともなって、国連で地位を得る運動は、そこに最大の場を占めようとするソ連の目的に動かされたものになる。ニナ・パポヴァは「私たちは、国連の陣営の中に、軋轢と不和の種を蒔く反動的な要素のあらゆる試みに反対して力強く立ち上がることをすべての国の女性たちに勧告する。・・・私たちは、国際民主主義の前衛の派遣隊として無数に存在している」と発言する[23]。1948年8月、ワルシャワで開催された平和のための「知識人」の世界会議において、コミンフォルムは国際闘争を展開する。そのときのフランスの代表の中にイレーヌ・ジョリオ＝キュリーとユジェニー・コトンがいた。これ以降、国際民主女性連盟は、共産党にコントロールされる国際運動として重要な役割を果たすことになる。連盟は共和国と平和の防衛に大勢の女性たちを動員し、300万人の署名を集めて国連に提出した[24]。

一方、西側も、平和のための国際運動を組織する。1947年4月26日から5月2日にかけて、カトリックによって主催され世界28カ国が参加した「世界母親運動」創設会議が開催された。平和運動は、母性主義の特徴を持つことが多い。というのは、息子たちを奪った戦争に当然反対するであろう母親たちを取り込むためである。カトリックの側のモデルとなる母親像は、愛によって全てを家族に与える犠牲的母親である。自分は何も持た

---

[20] 同上 p.161、渡邊啓貴『フランス現代史―英雄の時代から保革共存へ』中公新書、1998年、p.33.
[21] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.60.
[22] *Ibid.*, p.84.
[23] *Ibid.*, p.60.
[24] CHAPERON, Sylvie, *Les années Beauvoir (1945-1970)*, Fayard, 2000, p.127.

ず、何も求めないで、できるだけたくさんのパン、平和、愛情を子供に与える母親こそが重要であり、尊重され、評価されると訴えた。その会議では、実際には根拠がないにもかかわらず、共産主義を家族の解体をもたらすものとして誹謗するキャンペーンがおこなわれた[25]。

フランス女性同盟は、すぐさま、共産主義者は家族と母親の擁護者であると反撃する。共産主義者の母親モデルは、勇気ある母親、子供たちを救うために危険にたちむかう母親である。機関紙『フランス女性』には次のように書かれている。「戦争の扇動者たちは、優しく柔和な母親たちが子供を守るためには、ライオンの心と爪を持っていることを知らねばならない。」それ以降、共産党の平和運動は、すべて母親の言葉をとおして発せられることになった。「共和国の敵は私たちの子どものパンを危機に陥れている」「女たちよ、私たちの家庭を守ろう」といった表題がつけられ、「ママ、私を守って！」と書かれた乳児の写真が掲載される[26]。1948 年の国際民主女性連盟の会議で、「フランスの母たちは決して自分の息子をソヴィエト連邦に対する戦争のために与えない」という誓いが言われ、このフレーズは、その後、様々な機会で何度も繰り返された[27]。

西側は、1947 年 9 月末、国際民主女性連盟の設立に対抗して、52 カ国を集めて「平和のための世界協約」会議をパリのユネスコ本部で開催した。「個人は神聖」「平和のために働くことは全女性の義務」「物質的・精神的生活水準の上昇」の 3 原則がうたわれた。主催はオーリオル夫人とビドー夫人であった。ジャネット・ヴェルメールシは、アメリカに結びついた「世界協約」を主催したビドー夫人を、国際的な反動運動の頂点にいると告発し[28]、「国際民主女性連盟に対抗するために、長い間死んでいたフェミニストの古い運動を生き返らせ、それを作り出そうとする試みではないのか？」と、反動とフェミニズム運動を結びつけて批判した。党の平和委員会の役割は資本主義諸国の政府に対する闘いにあり、国際民主女性連盟は情熱的にそれを推進した[29]。

1950 年 3 月 16 日から 19 日にかけて、国際民主女性連盟は、ストックホルムで開催された「平和のパルチザン世界会議」に参加した。そこで有名な「軍備撤廃と原子爆弾禁止のアピール」（ストックホルム・アピール）がだされた。フランス女性同盟は、委員会を設置して署名活動を開始する。ストックホルム・アピールは、1950 年末に 4 億とも 5 億ともいわれる署名を集めた。そのうち約 950 万はフランス人の署名とされている[30]。

しかしながら 1951 年 1 月、国際民主女性連盟は、フランス政府によって、世界労働組合連盟や世界民主主義青年連盟とともに解散を命じられる。モスクワへの服従を非難されたのである。国際民主女性連盟は本部をパリからベルリンに移し、東西の緊張の中心地ベルリンで、ドイツの再軍備に反対して立ち上がり、ソ連以外の占領当局の陰謀に抗議し、「民主的」国家として、ドイツ再統一を宣言する。そしてドイツの女性に、平和のパルチ

---

25 *Ibid.*, pp.115,117.

26 *Ibid.*, p.116.

27 *Ibid.*, p.128 ; ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.275.

28 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.83.

29 CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, pp.126-127.

30 CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, p.130.

ザンに加わるように呼び掛けた[31]。

女性たちの国際平和運動は、戦争直後には地域や利害を超えて協力しあっていたのだが、冷戦はその状況を変えた。この時期に最も活発に活動したのが、国際民主女性連盟であった。例えば、朝鮮におけるアメリカの帝国主義侵略に対する大衆抗議をコーディネイトし、アルジェリアとベトナムにおけるフランスの植民地反対闘争と連帯のキャンペーンをおこなった。また、インドシナへのアメリカの侵略、中東へのイスラエルの侵略行為に反対し、スペイン、ポルトガル、ギリシャ、ラテンアメリカ諸国の民主主義を支援し、南アフリカのアパルトヘイトに対する闘争を助けるなどの活動をおこなった[32]。しかし、1954年4月、国際民主女性連盟は、冷戦に結びついた政治団体であるという理由で、国連の諮問の地位を失った。ところがこれは反民主主義的とみなされる手続きによっていたので、敵・味方の双方から抗議の声があがったが無駄であった[33]。

女性たちの運動が平和的共存に戻るのは、スターリン死後の雪解けの時期である。1955年7月、ローザンヌで開催された「世界母親大会」には、66カ国から1000人以上が集まった。開会の辞を述べたユジェニー・コトンの演説には共産主義への言及はなく、母性主義に基づく世界の平和が呼びかけられている[34]。しかし国際民主女性連盟が国連における地位を回復するのは、1967年6月まで待たなければならない。国連に復帰後、この連盟は女性のために決定的な貢献をおこなった。1972年に国際女性年を提案し、1975年世界女性年を記念してメキシコで開催された国連の世界女性会議に参加し、東ベルリンでの世界会議の発起人となった[35]。

3．朝鮮戦争国際女性調査団

平和のための闘いを訴えるにあたって、具体例としてたびたび繰り返されたのが、朝鮮の悲惨な状況である。朝鮮戦争について、アメリカ合衆国は、北軍に領土を攻撃された南朝鮮が国連軍の援助を要請したとするが、共産主義者は、アメリカに売られた南朝鮮がソ連の影響下にある平穏な北朝鮮を攻撃したとする。フランスは国連軍の一員として朝鮮に軍隊を派遣する。当時のフランスは、政治的・社会的にどのような状況であったのか？

朝鮮戦争は世界的な特需景気をもたらしたが、フランスでも1950－51年ごろは輸出が増大し、投機的インフレによって物価が上昇、高度経済成長の時代が始まっていた。50年3月に、フランスはアメリカとの相互防衛援助条約を結び[36]、1951年4月に、欧州防衛共同体（EDC）構想が始まった。これはソ連の脅威に備えた西ドイツ再軍備の必要性と同時にその脅威の抑止の解決策として考えられたものであった。さらに同年、欧州石炭鉄鋼共

---

31 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*,pp.142-143.

32 http://encyclopedia2.thefreedictionary.com/Women's+International+Democratic+Federation+WIDF

33 Chronique ONU-Un bref aperçu des droits des femmes de 1945 à 2009, op.cit..

34 CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, p.130；ユージェニエ・コットン「平和をきずくもの」『婦人公論、1955年9月、pp.48-55.

35 http://encyclopedia2.thefreedictionary.com/Women's+International+Democratic+Federation+WIDF

36 渡邊啓貴、前掲書、p.35

同体（ECSC）が結成された。しかしフランス人の目には、これはアメリカ資本主義の市場拡大であり、アメリカの植民地化の開始にみえた。EDC 構想はアメリカの軍事力に基づく北大西洋条約機構（NATO）への複雑な感情と結びついていた。フランス国内に外国が指揮する司令部が置かれ、フランス人立ち入り禁止の軍事基地があることは、フランス人の感情を害していた。51 年初め、アイゼンハワーが初代 NATO 軍司令官としてパリに到着すると、全国で「アメコー帰れ」の落書きが見られ、反対デモが吹き荒れ、保守派もフランスがアメリカ合衆国の従属的地位に置かれることに抵抗した。しかし実際には、政府は親米であった。52 年 5 月、NATO 軍司令官としてリッジウエイが着任すると、再び「アメリカの占領」に対する抗議デモが沸き起こったが、政府はデモを組織した共産党に対して厳しい弾圧をおこなった。これに対しては、作家のヴェルコールや哲学者サルトルら共産党とは距離を置いていた知識人までも「黙ってはいられない。黙っていることは共犯だ」と声をあげ、「ファッショ的」であると非難した[37]。

このような社会的背景のなか、国際民主女性連盟は 1951 年 5 月 6 日から 27 日にかけて 20 人の女性からなる調査団を北朝鮮に派遣した。彼女たちの調査報告は、6 月 20 日から 24 日にかけてソフィアで開かれた国際民主女性連盟の執行委員会で検討され、次いで『私たちは弾劾する』と言うタイトルで、フランス女性同盟によって刊行された。「はじめに」で述べたように、そこにはアメリカ合衆国の兵士がおこなったとする略奪、破壊、拷問、大量殺人が写真入りで詳細に記録されていたので、反アメリカの大論争が生じた。原子爆弾の脅しがあったことにも触れられており、それに反対するストックホルム・アピールが沸騰した。

ジャネット・ヴェルメールシは、フランス女性同盟の機関誌『フランス女性』の中で「女性たち、母親たちよ、この小さな朝鮮人、ベトナム人の目を見よ。彼らは苦痛と非難を負わされている。なぜこんなに苦しまなくてはならないのか」と訴える。子供たちが脅かされていること、無垢の人たちが死と苦痛に襲われていることに強く心を揺さぶられた女性たちは、戸別訪問をし、地区委員会をつくり、子供をつれて街頭や市場に出て署名を集めた。1951 年 3 月 11 日に開催された軍備撤廃のための女性の国民会議には、共産党の新聞によると、2 万人とも 3 万人ともされる女性たちがフランス全土から集まった。イレーヌ・ジョリオ＝キュリー、クロディーヌ・ショマ等の著名人が壇上にあがり、「軍備縮小、朝鮮とベトナムの戦争反対、ドイツの再軍備拒否、スターリンの平和主義提案、貧困と失業の撲滅」を、「自分たちが産み育てた命を守りたい」母親たちに訴えた[38]。平和のための催しや会合が何度も行われ、国際民主女性連盟の女性たちは精力的に活動した。

ところで、この報告書に書かれていることはすべて真実なのだろうか？フランスの研究者ルネ・ルソーは「朝鮮の事件は偽の情報に基づく大量動員のとりわけ顕著な例である。朝鮮がこの戦争で被害を受けなかったのではない。その逆である。戦争は 1953 年まで続き、この国を荒廃させた。しかし、敵である資本主義は、アンクル・サム[39]のなかでしか具体的に表現することができなかったので、左翼の党は特定の傾向のある情報提供者によ

---

37 同上、p.63

38 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.146 ; CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, p.129.

39 アメリカ合衆国政府の比喩。

って与えられた説明を採用したのだ」と述べている[40]。「偽の情報」とするのは言い過ぎであるとしても、一方的で偏った情報である感は否めない。

女性たちの活動は、朝鮮戦争の激化にともなって、アメリカ人は細菌兵器を使用しているというさらに不快で恐ろしい非難を帯びたものになる。1952年、フランス女性同盟はこのテーマで国際女性デーを準備した。「アメリカ軍基地の廃止、平和政策を実行する政府」を要求して、アメリカ兵にアメリカの母への手紙の形で書いたビラをまいた[41]。4月には、強烈な衝撃を与える膨大な量のビラを印刷する。眠っている赤ん坊の上に飛びはねる蠅や蜘蛛の影が二重写しになっている写真である。これは、アメリカが細菌戦を行っているとする朝鮮戦争のイメージであった。「ゆりかごの上のペストとコレラ」、「凶悪なこの犯罪をやめよ！」と見出しが付けられ、写真の横には、「最も恐ろしい病気を運ぶ昆虫をまき散らす2000の爆弾が中国と朝鮮の上にアメリカの飛行機によって投げ入れられた。ペストに汚染されたおもちゃや食糧が腹をすかせた子どもたちの食べ物として投げ入れられた。子どもたちは恐ろしい苦しみのなかで死んでいる。私たちの子どもは脅かされている。政府はその犯罪を放置したままである。フランス女性同盟は、ただちにこの犯罪者どもに警告するよう、全ての女性、すべての母親に呼びかける」と書かれている。ビラの下の部分には、1952年3月末に、オスロで開催された世界平和会議事務局によって開始された細菌戦反対アピールを掲載し、ニューヨーク軍縮委員ジュール・モシュ氏、国際連合、トルーマン大統領、フランス駐在アメリカ大使および領事、議員たちへ「抗議の波」を送るように訴えている[42]。フランス人の多くは自国内にアメリカの基地が存在していることに不満を抱いていたので、この呼びかけに積極的に応えた。平和運動を支持する女性たちは、5月にリッジウエイ将軍が来た時、フランス共産党によって組織された大規模なデモに加わった。

国際女性調査団に参加したジレット・ジーグレーによる小説『江西(カンセ)の殺人』[43]の最後の場面に描かれているのは、このデモの情景である。次はジーグレーの人物像とこの小説に

---

40 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, pp.144-145.
41 *Ibid.*, p.149.
42 *Ibid.*, p.150.
43 ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, Les Editeurs Français Réunis, 1953.

ついて考察する

4．ジレット・ジーグレーの人物像

国際民主女性連盟が派遣した朝鮮戦争調査団に加わったフランス人団員、ジレット・ジーグレー（Gilette Ziegler）とは、いかなる人物だったのか？現在では、彼女に関する情報を見つけるのは難しいが、1970年代には、ジャーナリスト、小説家、歴史家としてよく知られていた。フランス国立図書館のカタログには彼女の著作が20作載っており、そのうち小説は8作である（最も古い著作は1935年、最も新しいものは1979年出版である）。残念ながら日本語で読める著作はないが、唯一、マリー・キュリーとイレーヌ・キュリーの手紙を集めた『母と娘の手紙』の「まえがき」部分は、ジレット・ジーグレーが書いたものである。彼女はこのキュリー親子の往復書簡出版の際の編集もおこなっている。訳者あとがきには、ジレット・ジーグレーについての5行ほどの解説があり、「ドキュメンタリー編集の非凡な感覚がみられる」と書かれている[44]。

1958年に出版された『唯一の証人』[45]に挟まれていたビラのなかの著者紹介文は、「ジレット・ジーグレーはニースで生まれ、国立古文書学校を卒業した古文書学者である。戦前は古銭学研究を専門としていた。ドイツ占領下では、レジスタンス組織で働き、バス=ザルプ地方で『持つ（*Tenir*）』というタイトルの小さな地下新聞を編集した。解放後はジャーナリストとなり、東洋の諸国、とくに『朝鮮戦争』（1951）、そして『中国』（1952）についてのルポルタージュを書いた。小説、『私はP.S.F.にいた』（レジスタンスの出来事）と『江西の殺人』（朝鮮の悲劇）の作者」と書かれている。

『私はP.S.F.にいた』[46]は、彼女が北朝鮮を訪問する前の1950年に出版された小説である。この本の「まえがき」には、ジレット・ジーグレーのポートレートが次のように描かれている。著者はジャーナリストで百科事典編纂者のピエール・アブラアムである。

> 「彼女の肖像を描くとしたら、次のような形容詞を使わなければならないだろう：美しい、気品のある、エレガント、良い香り。・・・別の言葉で言うと、アカデミックで、因習的な小説にでてくる失われた上流社会のヒロインの姿、つまり、もしあげるとすればポール・ブールジェの小説のヒロインである。そして、もしこの申し分のない若い女性と話しをすることになったとしたら、彼女はポール・ブールジェの世界の人物よりもずっと思慮深く、読書家で、仕事を持っていた—そう、働いていたのだ—避けられていた事（おそろしい！）をしていたと知るだろう。・・・ある日、あなたの目の前で、このポール・ブールジェのヒロインが、何か新しい現代的なもの、つまりエレンブルグの『パリ陥落』あるいは、アラゴンの『コミュニストたち』に類似するものに変化したことがわかるだろう[47]。」

ポール・ブールジェは、1900年ごろに活躍したフランスの作家である。ブルジョワ階級の家族と女性を題材にした心理小説を多数発表しており、そのヒロインは、結婚するまで

---

[44] マリー&イレーヌ・キュリー著、西川祐子訳『母と娘の手紙』人文書院、1975年、pp.5-10、292.

[45] ZIEGLER, Gilette, *Le Seul Témoin,* Julliard, 1958.

[46] ZIEGLER, Gilette , *J'étais au P.S.F.* , Les Éditeurs français réunis, 1950.

[47] ABRAHAM, Pierre, Présentation, *Ibid.*, p.3.

は父親の、結婚後は夫の庇護下におかれ、エレガントで貞淑、無為でいることによって社会的ステータスのシンボルの役割を担う女性たちである。例えばサロンを開き、ピアノをひき、召使いを采配するような上品で美しい女性の姿を思い浮かべるとよい。「働くことが避けられていた」と書かれている理由は、それが「階級からの脱落」を意味していたからである。女性が働くのは貧しい労働者階級だけとみなされていた時代であった。ジレット・ジーグレーの少女時代は、ポール・ブールジェの時代からは一世代隔たっているとはいえ[48]、まだ 20 世紀はじめの価値観が色濃く残っていた。ジレット・ジーグレーは、おそらく成人した後も、失われた上流階級の雰囲気を持つエレガントな女性であったのだろう。1932 年、彼女はフランス空軍の技術将校でありパイロットでもあったアンリ・ジーグレーと結婚している[49]。ただ、当時はまだ上流階級の女性が職業を持つことに否定的な社会であったのにもかかわらず、彼女は優秀な成績で古文書学校を卒業した後、1935 年に学位論文『中世のグラス市の歴史』[50]を発表し、文筆家として活動していた。

ところが、ちょうどそのころナチスが台頭し、ヨーロッパに戦争が近づいていた。1939 年 9 月、フランスは再び戦争に突入した。「奇妙な戦争」と呼ばれる戦闘のない数カ月の後、フランスはあっさりと敗北、占領地区と自由地区に分断された。その一方でドゴール将軍の「自由フランス」がイギリスからレジスタンスを宣言し、国内でもレジスタンスの地下活動が生まれた。1944 年のパリ解放後、戦争は終結するが、インドシナやアフリカの植民地で戦争が続き、冷戦がはじまった。ジレット・ジーグレーは、古き良き時代のブルジョワジーの娘として生まれ、このような社会の変化とともに成長し、やがて国内レジスタンス運動にかかわり、ジャーナリストとなり、朝鮮や中国にまで出かけてルポルタージュを書いた。さらに戦後から 50 年代にかけて、自分の体験に基づいた小説を次々と発表している。これらは、小説という形をとってはいるが、もともとの歴史学者としてのすぐれた分析力や推理力が生かされており、史料としても十分に役立つ時代の証言にほかならない。

例えば、『私は P.S.F.にいた』は小説であり自伝ではないので、主人公がジレット・ジーグレーであるとはもちろん言えないのだが、さきほど引用したピエール・アブラアムは、「ジレット・ジーグレーはニースで生活していたのだから、またマキ[51]のあったアントルカステルやプロヴァンスをたびたび訪れていたのだから、それについて話す権利はある」、「ジレット・ジーグレーが P.S.F.について話すとき、彼女は知っていることを話しており、彼女はそれを話す権利を持っている。また、彼女はレジスタンスの秘密活動、その紆余曲折、その危険を話す権利を持っている」と書いている[52]。タイトルにある P.S.F.とは Parti

---

48 筆者は生年月日を特定することができなかったが、結婚年と学位論文提出年から、1912 年前後の生まれと推察される。1981 年没。

49 'ZIEGLER (Henri, Alexandre, Léonard)', in *Who's who in France=Qui est qui en France : dictionnaire biograhpique*, Paris :Lafitte, 1953(1re éd.), p.1740 ; 'Henri Ziegler', in *Aéromed*, n°11, avril 2005, p.6. 注記：以上の文献では、Gillette のように'l'が 2 つになっているが、掲載されている写真からみて同一人物である。

50 ZIEGLER, Gilette ,*Histoire de Grasse depuis les origines du consulat jusqu'à la réunion de la Provence à la couronne(1151-1482)*, A.Picard, 1935.

51 南フランスでレジスタンス運動の中心になった組織。

52 ABRAHAM, Pierre, op.cit., p.4.

Socialiste Français の略称なので、訳せば「フランス社会党」になるが、実質はド・ラ・ロック大佐がひきいたファシスト集団「火の十字団」の後身であり、現在のフランス社会党の前身、S.F.I.O（社会主義労働者インターナショナル・フランス支部）とは別のものである。物語の中で、ヒロインのエレーヌ・ヴェテルレは、この右翼の党員からレジスタンスの活動家に、そして共産党のシンパに変化する。ヒロインの道のりがジレット・ジーグレーの道のりそのものではないとしても、彼女は自分の理想、現実の世界の闘争、イデオロギーの葛藤を登場人物に託して語っているのは間違いない。

『唯一の証人』も同様の傾向をもつ小説である。この作品の背景は、戦争中ドイツに協力した人々と、抵抗した人々に引き裂かれていた不安定なフランス社会である。主人公は戦争で負傷し生きる気力を失っていた男である。彼は、偶然、左翼運動に工作員を潜入させ情報をさぐる闇の組織に入る。しかし生まれ故郷で家族や友人と再会し、自分のさせられている役割の曖昧さに気づき、その組織から自身を解放しようとする。この小説の解説には、「著者がこの奇妙な世界に似たものを経験して知っていることに衝撃を受ける。彼女は内側からその世界を描き、それらを突き動かす思想、それを分裂させる矛盾を表現している。」と書かれている。彼女自身、冒頭で、「この小説にでてくるすべての人物は架空の人である。生存しているあるいは生存していた人とのあらゆる類似は完全な偶然である[53]」と断り書きをつけている。登場人物は実在の人物に誤解される可能性があるということなのだろうか。

ジレット・ジーグレーは 60 年代以降、しばらく休んでいた中世史の研究を再開する。1963 年に『ルイ 14 世治下のヴェルサイユの舞台裏』、1965 年には、その続編である『ヴェルサイユの舞台裏：ルイ 15 世とその宮廷』、1967 年に『パリの秘史』などの歴史書を次々と発表する[54]。しかしその一方で、小説は封印する。

5.『江西の殺人』あらすじ

ジレット・ジーグレーは、帰国後ほどなく、朝鮮で見た出来事をもとに『江西の殺人』というタイトルの小説を書いている。この本は、既に述べたように、フィクションとして書かれている。したがって、実際の国際調査団に参加したフランス人女性は、ジレット・ジーグレーのみであり、また死亡した調査団の団員はいない。しかし小説では、調査団に参加したフランス人女性のひとりアニエス＝マリーは爆撃で死亡し、もうひとりエレーヌ・ヴェテルネ（『私は P.S.F.にいた』の主人公と同一人物）が調査団に参加した人物として登場する。しかし、彼女が実際に訪れた北朝鮮の江西の町での出来事を軸にストーリーが展開し、国際民主女性連盟の報告書の内容と重なる描写も随所にみられる。つまり、ストーリー展開はフィクションであったとしても、状況描写において、かなりの事実が描かれているとみてよいだろう。また、登場人物の会話や心理描写に、フランス社会の朝鮮戦争に対する心情やジーグレー自身の見解が反映されているのは間違いない。以下では、この小説のあらすじを紹介する。

プロローグ

---

[53] ZIEGLER, *Le Seul Témoin*, p.6.

[54] *Les coulisses de Versailles sous le règne de Louis XIV, R. Julliard, 1965 ; Les coulisses de Versailles : Louis XV et sa cour ; Histoire secrète de Paris.*

朝鮮戦争に派遣されたフランス軍中尉ピエール・レムリーは、戦闘の後、江西の町に入り、そこで、中国人によって埋葬される若い白人女性の死体を見つける。驚いたことに、彼女の手首には、「アニエス＝マリー・ジョルジン、スタニスラス通り、5番、パリ」と記された身分証明書がついていた。後に明かされるが、彼女は女性の国際調査団の一人であり、爆撃によって死亡したが、遺骸を運ぶ手段がなく、そこに残されていたのだ。ピエールは彼女の残した日記を読み、衝撃を受けるとともに、その日記を共産党活動家の兄を通じてパリの女性組織に託した。

第1部

主人公のレイモン・レムリーは、フランス南部の地方都市クゼのガラス工場経営者である。妻は末息子のラウルを生んだ時に死んだ。レイモンは妻の姉のシモーヌとともに、息子のジャック、娘のカトリーヌ、ラウル、そして「自由フランス」の闘士として戦死した兄の二人の息子エルヴァとピエールを育て、平凡だが満足して暮らしていた。戦争中はペタンの側にいて、レジスタンスに否定的だった。彼は、ジャックとピエールが成人して、インドシナと朝鮮の戦争の志願兵となったことを誇りに思っていた。ただ、ピエールの兄エルヴァは共産党の活動家になり、20歳でレイモンの家から出て行った。工場の近くにはアメリカの基地があり、「アメリカ人帰れ」の落書きがあったが、彼はアメリカ人がいなくなったら、共産主義者がやってくると思っていた。しかし、政治にかかわることを避けていて、彼の工場の労働者たちがストックホルム・アピールに署名することや、その他「モスクワの命令」を実行することを容認していた。

ある日、エルヴァから「ピエール、病気で送還。ニースのミモザ病院、会いたい」という電報がくる。ニースにはレイモンの愛人のロランスがいた。ロランスはもとレジスタンスの活動家で、レイモンとは違った考えを持っていたが、二人は政治の話を避けていた。ピエールは朝鮮で精神に異常をきたし、東京で二ヶ月間治療を受けた後、フランスに送還され、ニースのアメリカ人の病院にいた。しかし何も覚えていないということだった。レイモンは病院で、ピエールにはアメリカ人将校を殺した容疑がかかっていると知らされる。医者はフランスの志願兵のなかには、もともと問題のある若者が多いとほのめかす。ピエールは銃殺刑を逃れるために仮病をよそおっているのかもしれなかった。

エルヴァによれば、朝鮮の戦争は他の戦争と違って、大量の皆殺しだった。ピエールはそれに耐えられず気が狂ったのかもしれない。また彼は事件の前に兄に書類を送ってきていて、それをパリの女性組織に預けてあると話した。

第2部

朝鮮では、アメリカ軍が戦闘をおこなっていた。アメリカ兵のトッドは、共産主義者のテロに対して闘う十字軍に加わるという使命感に燃えて、北朝鮮の軍隊に志願した。しかし戦場では、女性も子供もキリスト教の牧師も大量に殺さなければならない。トッドはピエールの事件の時、酔いつぶれてその場で倒れていたらしい。

一方フランスでは、ストライキが頻発していた。レイモンは、アメリカ人将校に、工場でストライキがおこったら抑えるために手と貸そうかと提案される。工場の創業者であるレイモンの父親は、言葉が不自由な老人だったが、外国人が入って来るのに断固反対する。レイモンはストを一日だけ認め、労働者の賃上げに譲歩する。

レイモンはロランスに会う。彼女は、レイモンの友人が、共産党の新聞に掲載されてい

た朝鮮戦争の細菌戦の記事は作り話で、ナチの収容所の話も同じく作り話だと言うのを聞き激怒。レイモンとロランスは決裂する。ロランスは昔の仲間に再会したくなり、パリの女性組織を訪れ、彼女たちの演説に共感する。しかし結局、朝鮮の本当のことはわからないと思う。一方レイモンも、ピエールの残した書類を見るために、女性組織を訪れ、アニエス＝マリーの手記を手に入れる。

第３部

アニエス＝マリーは国際女性調査団の一員として朝鮮にはいり、戦争の状況を見、人々の話を聞き、それを日記に残していた。レイモンはこの日記を繰り返し読み、混乱する。

工場では、レイモンが賃上げを認めたために、同業者の工場労働者も賃上げを要求し、大規模な労働争議がおこっていた。そのとき、アメリカのトラックが来て群衆に突っ込み、一人死亡、二人が負傷するのをレイモンは目撃する。アニエス＝マリーの日記に書かれていた「タンク車が突っ込み、仰向けに横たわった人たちの上を通った」という言葉が重なって彼の頭をよぎる。新聞は「アメリカ人が襲われた」ので仕方なく轢いてしまったのだと主張するが、レイモンは労働者のために裁判で真実を証言する。賃上げを認めたことで、同業の経営者たちから恨みを買っていたレイモンは、はめられて取締役の名前だけを貸していた会社から横領容疑で告訴される。

レイモンには、様々な疑問が沸き起こる。インドシナ戦争はどうしておきたのか？朝鮮戦争は？どんな犠牲を払ってもそれを続けなければならないのか？どんな原則の下にアメリカの占領が必要とされているのか？共産主義者が真実をゆがめている事を非難する以外に答えはないのか？

ニースの病院から送り返されてきたピエールは、高熱をだして死にかけていた。レイモンに会うと、彼は朝鮮であったことを絶望的な狂乱状態で話す。しかし突然冷静になって、「つまるところ・・・僕たちはまさに殺すためにあそこにいた」とつぶやく。

レイモンが外に出ると、沢山の若者のデモが続いていた。彼は「ゴー・ホーム！アメリカ人は出ていけ」「朝鮮戦争をやめろ！ベトナム戦争もやめろ！リッジウエイ出ていけ！リッジウエイ、人殺し」と叫ぶ列に加わる。

以上が『江西の殺人』のあらすじである。次は、この小説のなかのいくつかの描写を検討する。

６．アニエス＝マリーの日記と登場人物の心理

アニエス＝マリーの日記の再現として書かれている第３部第１章は、国際民主女性連盟の報告書と重複するが、報告書には書かれておらず、それを補うことのできる描写もある。

例えば、彼女たちがどういうルートをたどって北朝鮮まで行ったのかがわかる。シベリアの上空を飛び、ノヴォシビルスクに寄港し、クラスノヤルスク、イルクーツク、バイカル湖を見て、チタで中国の飛行機に乗り換え、中ソ国境を超え、チチハル（斉斉哈爾）に寄港、ムークダン（瀋陽）に到着。アニエス＝マリーはそこで日記を書き始める。ここから旅はすべて夜に行われる。汽車でアントン（丹東）に向かい、そこから一本櫓の小さな漁船に乗り、明かりもつけずヤールー（鴨緑江）を渡り、北朝鮮国境の町シニジュ（新義州）に到着した。

また日記は、団員の構成についても触れている。すなわち彼女たちはヨーロッパ、アフ

リカ、カナダのほとんどすべての国からやって来ていて、カトリックもいれば、プロテスタント、ムスリムもいた。また東ドイツ、西ドイツから来た二人のドイツ人は共産党員だと思うと書かれている。あらゆる職業、あらゆる年代の女性たちであり、ベルギーの代表が60歳で最年長、日記を残したとされるアニエス＝マリーは最年少である。

アニエス＝マリーが調査団に参加したきっかけは、もう一人のフランス人メンバーであるエレーヌ・ヴェテルレにさそわれたからである。彼女は「少女のグループ」[55]に、「どんなふうに戦争が行われているかを見るための証人の派遣を頼んで来た」のである。エレーヌ・ヴェテルレは、「朝鮮で、アメリカ人たちはフランスでヒトラーのドイツがしたのと同じようにふるまっている」と言った。アニエス＝マリーは、ナチの下で人々が無気力にしているのを見ていたので、「こういうことに耳をふさいだままでいるのはよくない、不正義と闘わなければならない」と思って参加したのだ[56]。

それでは朝鮮の人々は彼女たちの訪問をどう受け止めたのだろうか？国際民主女性連盟の報告書には、人々が彼女たちに不信感を抱いた様子はうかがえない。しかしアニエス＝マリーの日記からは、必ずしも歓迎されたわけではないことがわかる。例えば、道端で小さな少年に出会った時、その少年が彼女たちを見るやいなや、恐怖のあまり震えているのをみて、「私たちヨーロッパ人の顔が、飛行機よりももっと彼を怖がらせたとわかった。・・・耐えがたいことです。この少年は私たちが彼を殺しに来たと思っているのです」と書いている。また、「私たちを獲物のように虐殺したのは白人だ。おい。私の子供はみんな死んだのだ。おまえのキリストがいるなら、なぜこんな残虐行為を許しているんだ」と責められる[57]。突然やってきた白人女性たちを見て、事情を知らない現地の人たちが恐怖をいだいたり反発したりするのは当然である。アニエス＝マリーの父親は戦闘で闘ったことを誇りにしており「祖国のために死ぬことができなければならない」と言っていた。しかし、彼女は、「敵をひどく苦しめ、女や子供を殺し、すべてを焼く」この戦争は、考えていたものとは違うことに気づく[58]。

ジレット・ジーグレーは履歴でみたように、もとはブルジョワ階級の出身であった。しかしレジスタンスの経験の後、左翼を支持するようになった。このようなジレット・ジーグレー自身の変化のきっかけを反映していると思われる場面は、レイモンの友人ドプレがロランスに「赤たちの最近の作り話は特におもしろかった」と、中国と朝鮮の細菌戦の記事がでっちあげだという話を切り出すところである。

ロランスは、細菌戦がすべて嘘だとはおもっていなかったが、「今回は、これは少しおおげさだと認めます」と冷静に答える。ところが、ドプレの次の言葉にロランスは仰天する。

「これらのアメリカの残忍さという嘘が、感受性の鋭い人の同情を引くために作り出されたと、何故私が考えるかわかりますか？有名な強制収容所からです。」「人々がレジスタントと呼んでいたこれらの詐欺師と共謀して、共産主義者たちがいままで試みた最もすばらしいこけおどし。つまり戦争中の一つの国が、陰謀を企てた人たちを収容

---

[55] 少女のグループというのは、フランス女性同盟のもとになった姉妹組織であるフランス少女同盟のことであると思われる。
[56] ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, pp.143-146.
[57] *Ibid.*, pp.150-157.
[58] *Ibid.*, pp.160-161.

し、彼らに限度を超える害を与えた。それがその国の権利だった・・・。もちろん、収容所の中で死んだ人たちもいた。空腹で苦しんだ人たちもいた。ドイツのすべてで同じだったように・・・。そしてそれをもって、死体置き場、ガス室、死の収容所という化け物のような冗談をでっちあげた[59]。」

ロランスにとって、人生のなかで価値のあるのはレジスタンスの思い出だけだった。

「取るに足らないものだ、私の一生は。のんきで空っぽの子供時代、喜びも苦しみもない結婚、いくつかの付き合い、娯楽、お金の心配、成功したり失敗したりした展覧会・・・。結局ゼロだ。あの占領の 4 年間、レジスタンスを除けば。そこで私は、漠然と友愛、集団活動への魅力を感じていた[60]。」

このように考える彼女にとって、レジスタンスを否定することは許しがたかったし、そう考える人の言うことはすべて嘘だと思われたのだ。この出来事の後、彼女は「彼（ドプレ）が、この（朝鮮戦争の）悲惨を嘘だというなら、おそらくそれは本当だろう。それは本当に違いない」と考えるようになり[61]、それを確かめるために、女性組織に向かう。

女性組織では、演者が、ナチの弾丸に倒れた女性たちの怒りをひきあいにだしながら、「アメリカ人たちは、爆撃で朝鮮のレジスタンスを打ち破ることができなかったので、伝染病を蔓延させることによって屈服させようとしている。・・・世界中の怒りによって・・・原子爆弾の使用を糾弾した多くの男女が細菌戦争をやめさせなければならない」と主張していた。ロランスは、衝動にとらわれていくのを感じ、そこにいた女性たちと一緒に拍手する。しかし彼女は細菌戦の存在の証拠を得ることはできなかった。彼女は自問する。

「結局、この話の証拠は何もなかった。伝染病はある。しかし荒らされた国では普通のことだ。私はもしかしたら納得させられるかもしれない。でも、もしマルク[62]がここにいたら、どう言うだろうか[63]。」

エレーヌ・ヴェテルレは、細菌戦が真実であると信じる理由として、アメリカ軍が残虐行為をしたと話していた。これを聞いた大勢の女たちから、ごうごうたる非難がおき、立ち上がり「人殺し！」と叫び声があがった。この様子を、ロランスはナチの占領下のニースの人々の叫びと同じだと感じる。しかし細菌戦の話は推測でしかなかった[64]。

病気になったロランスをエレーヌ・ヴェテルレが見舞いに来て、今のフランス政府は、ペタンの時代の対独協力者の政府だから闘わなければならないと力説する。ロランスは心を動かされるが、エレーヌの激しい怒りに燃えた目を見て、泣いてしまう[65]。彼女はエレーヌの激しさについていくことができない。

一方、主人公のレイモンの考えが大きく変化するきっかけは、アリエス＝マリーの日記である。彼はそれを繰り返し読んで、朝鮮戦争の現実に気づく。それでも拷問の話や生き埋めにされた話、戦車に轢き殺された話は信じ難かった。

「これら全部を誰がこの子供に語ったのか？どんな言語で？フランス語ではないはず

---

59 *Ibid.*, pp.121-122.
60 *Ibid.*, p.181
61 *Ibid.*, p.126.
62 レイモンの友人で、レジスタンス活動を通して左翼に理解のある医者。
63 ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, p.127.
64 *Ibid.*, pp.128-130.
65 *Ibid.*, pp.199-200.

だ。通訳が証言者たちの望むことを言わせることをできたのだろう。ヤンキーの兵隊たちが村を略奪し、女たちに暴行した。これはあり得る。しかし平然と体系的に大勢の市民を虐殺すること、それはないだろう[66]。」

と彼はつぶやく。それでもレイモンは、大戦中にドイツ人たちがやったことを思い返すと、兵隊は命令があれば、それに背くことはできないのではないかとも思えた。

「非人道的な命令、不正な戦争があり得ること、決められた時に従わなかったり、闘わなかったりすることを許容することができるだろうか[67]。」

結局、レイモンの考えは、デモの時アメリカ軍のトラックが労働者を轢き殺すのを見、自分がトラブルに巻き込まれることになってから、ぐらつき変化していくのである。

La Commission Internationale Feminine pour l'enquête sur les atrocités commises en Corée

Debout de gauche à droite : Eva Priester, Autriche; Ilyana Dimitreva, interprète URSS; Lala Flerovskaya, interprète URSS; Kate Fleron, Danemark; Abasia Fodil, Algérie; Hilde Cahn, Republique Démocratique Allemande; Li Kueng, Chine; Germaine Hannevard, Belgique; Candelaria Rodriguez, Cuba ; Bai Lang, Chine ; Trees Soenito-Heyligers, Hollande; Elizabetta Gallo, Italie; Miluse Svatosova, Tchécoslovaquie.

Assises de gauche à droite : Lilly Waechter, Allemagne Occidentale; Gilette Ziegler, France; Maria Ovsyiannikova, URSS; Li thi Quê, Viet-Nam; Nora R[illegible] Canada, Présidente de la Commission; Pak Den Ai, Corée; Lui C[illegible]

国際民主女性連盟朝鮮戦争調査団団員と通訳。
前列左から二人目がジレット・ジーグレー。

国際調査団の報告書『私たちは弾劾する』を読んだ人の何人かは、レイモンと同じような疑問を持ったのではないだろうか？通訳はどういう人物だったのか、何人いたのか？実は、報告書の見開きに団員の全体写真が掲載されているのだが、そのなかに通訳として二人の女性が写っている。二人の国籍はソヴィエト連邦である[68]。彼女たちは本当に通訳なのか？朝鮮語ができたのだろうか？しかしそれ以外に通訳についての情報はない。調査団は「朝鮮女性同盟」の要請を受けて出かけているので、その組織の女性たちが付き添っていたのは確かだろう。彼女たちが朝鮮語からロシア語に訳し、さらにフランス語なり英語なりに訳したのだろうか？いずれにせよ、疑問は残る。証言にはニュアンスがあることをジレット・ジーグレーはほのめかしているように見える。

おわりに

国際調査団の女性たちがヨーロッパから戦時下の北朝鮮まで、危険をかえりみず出かけていった動機は何だったのか？もちろん、平和を訴えなければという純粋な気持ちはあっただろう。しかしそれのみで説明するのは難しい

---

66 *Ibid.*, p.162.
67 *Ibid.*, p.163.
68 *Corée, Nous accusons : Rapport de la Commission de la Fédération Démocratique Internationale des Femmes en Corée du 16 au 27 mai 1951*, p.1.

ジレット・ジーグレーに限って言えば、彼女を駆り立てたのは対独レジスタンスの記憶である。50 年代はじめのフランスは、レジスタンス活動家がもてはやされた時代である。戦後復興をなしとげるために、ナチスドイツに抵抗した英雄的フランスという演出が必要だったからだ[69]。ジレット・ジーグレーにとっても、レジスタンスは人生において最も輝いていた時代だったのだろう。「レジスタンス、それは私にとって、侮辱されたり、あきらめたり、卑怯者になることを否定し、私が困難な使命を負っていれば、仲間たちの目に賞賛が浮かぶものだった」とロランスは言っている[70]。もし不正義があるのならば、ナチ占領下で自分たちが活動したように、それに対して闘わなければならない。何もしないのは共犯だ。そういう強い思いが、彼女を平和運動に向かわせたのは間違いない。

しかしそうは言っても、国際調査団に加わって激戦地の朝鮮まで行くのは、大変な決断である。おそらく、歴史家でありジャーナリストでもある彼女には、真実を知りたいという好奇心が強かったのだろう。現在では、女性ジャーナリストが戦争取材で活躍している話を聞くことも多いが、当時はジャーナリストであったとしても、女性が戦闘中の地域に取材に行くことなどほとんどできなかった。彼女は調査団に加わることによってのみ、実際に朝鮮を見て、話を聞く機会を得、そのルポルタージュを書くことができた。ただ、彼女は自分たちが自由に動き回っているのではなく、決められた場所を見て、決められた人の話を、決められた通訳をとおして聞いているのだということを理解していた。証言者は本当のことを話しているのか？アメリカ軍の兵士は本当にそれほど残忍なのか？どのような青年がフランス軍の志願兵になっているのか？彼女は、おそらく隠された事実があるのを感じていた。

結局、ジレット・ジーグレーは、国際民主女性連盟の活動に大いに共感し支援もしていたが、歴史研究者として、ジャーナリストとして、事実かどうか検証できないことを感情に動かされて書くことはできなかったし、人々に訴えることにもためらいがちであった。彼女の小説『江西の殺人』に描かれているのは、国際調査団の報告書には書かれていない戦争の複雑さ、理不尽さ、悲惨さ、不可解さである。

---

69 シモーヌ・ヴェーユ著／石田久仁子訳『シモーヌ・ヴェーユ回想録—20 世紀フランス、欧州と運命をともにした女性政治家の半生』パド・ウィメンズ・オフィス、2011 年、p.267.
70 ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, p.181.